

を目的させるものなるが故に、私の立場として固よりその不純、不眞面目を認容することができないのである。

(五)

以上私は簡略ながら私の所謂物名肉のみの結婚に對する極めて無遠慮な觀察及び批評を説述した。然らば次に私自身の結婚觀は果して如何なるものであるか。以下少しく本問題に觸れてみたいと思ふ。

私は上來屢々述べ來つた通り、結婚はその本來の意味に於ては所詮『異性たる二つの人格の肉體的並に精神的結合』であるに信ずる。而してその最も肝要な點は言ふ迄もなく人格の結合といふ一事である。然らば人格とは抑々何を意味するものであるか。人格の特性は先づ第一にそれが人間特有のものであつて、人間以外の一切の生物に全然適用がないといふことである。これは今更改めてこゝに特記する必要のないほど明白な事實であるが、しかも世人の多くは意識的に或は無意識的に、男女結合の場合主として或は全く、動物的見地よりのみ之を考慮し觀察して晏然としてをる。即ち彼等は結婚を全然性慾充足の

手段を見、殊に數百年數千年來性的生活に於てあらん限りの横暴を極めた無反省、無節制なる大多數の世界の男子達は、己れの配偶者を目するに恐ろしくも且つ大膽にも『人間の通路』、即ち子供を産む生きた道具と看做すに至つた。しかも多年の慣習上、婦人自らも亦かゝる男子の暴虐放埒の下にいつしか彼の意に阿諛し迎合して、殆ど全く自己を棄て自己を殺し男子の我儘な不道德の命ずるがまゝに、彼の養ひを受くる代償として彼の爲に慾を充し、子を産むの道具たる境涯に甘んずるに至つた。のみならずそれがいつしか、最高の婦徳として讃へらるゝまでに立ち到つたのである。(殊に世界の文明國中その最も甚だしきは過去及び現在に於ける我國の社會なるこゝこゝに喩々するまでもない。)併しながらそれは明らかに人生に於ける最も悲むべき謬想であり、また最大の不道德である。何となれば人間社會に於ける男女間の結合は、單なる性慾満足的手段でもなくまた種族保存の自然法でもない。此等は固より本能的、盲目的、無意識的ながら我等人類をして他の諸動物と同じく、男女結合生活の必要を感じしむる最有力な動因たるに相違ない。併しながらこゝまでは未だ私の所謂動物的本能の範圍を脱せざるもので、其間固より多少の差異あるも、大

體に於て凡ての動物に共通な雌雄結合生活の自然則である。然るに我等人類は他のあらゆる動物と異り、性的生活に於て斯の如き動物的本能以外、更に人間的・本能なる他の特殊な人類則を有して居る。

性的生活に於ける人間的本能とは一般動物に共通なる自然的本能とは大いにその意味を異にし、單なる手段或は道具としての異性を求むるに満足せず、深き精神的欲求に基き、特定の異性に對する強烈純眞なる憧憬の發露として性的結合を求むるに至れるその眞情を指すのである。而して斯の如き特定の異性に對する止み難き憧憬の情は、言ふまでもなくかの戀愛である。即ち性的生活に於ける人間と動物との間の本質的、根本的差異は、性的結合を求めしむるに至りし第一誘因として、其間に眞實なる戀愛の存せしや否やといふ一事である。然るに單に動物的本能に因る男女間の結合は、ソコに動物的なる性欲満足の快感あるも、何等人間的なる戀愛の精神的快樂がない。私が前に斯の如き結婚は人生に於ける最も悲むべき謬想であり、且つ最大の不道德であると言つたのは即ちこの意味に於てである。人間と動物との間の本質的差異を無視せる點にこの思想の悲むべき誤謬があり、そ

れを無視しつゝ依然無反省なる所にその大なる不道德が潜んで居る。

次に人格の第二特性は、何物を以てするも絶対に代替し得ざる獨自性、特異性にある。これ亦第一特性たる人間性と同じく極めて明白な事實である。しかもそれより一層多くの場合、一層多くの世人によつて全然無視し蹂躪せられてをる。我等は我等を圍繞せるあらゆる社會生活に於てその無数の實例を見せつけられてゐるのであるが、その最も甚だしきは教育及び結婚の場合に於てである。我國從來の教育制度は如何なる意味に於ても個性の成長、發展、完成を顧慮せるものではなかつたこと、しかも眞の教育の本旨は各人の中に眠れるこの特有な個性を自覺せしめ之を發揚せしむるにあるが故に、我國には未だ會て眞の意味に於ける教育の存在せざりしこと勿論である。結婚の場合に於て、當事者の意志の重んぜられず、その個性の尊重せられざること、随つて斯の如き所謂政策結婚の眞の意味に於ける結婚にあらざること既に繰返しく述べ來つた所である。

最後に人格の第三特性として擧ぐべきはその永遠性である。この特性あるがため、人格的結合の基礎の上に立てる人間の性的生活は、物或は名或は肉のみに根據せる非人格的結合

のそれに比し遙かに恒久性、不變性を有してをる。物及び名のみの結婚は其等の變易性、滅失性と共に極めて動搖し易く、また肉のみの結婚はその衰頹性、飽滿性に並行して尠からず破滅の危険あるに反し、力強き人格的結合に根柢せるまことの結婚生活は人格の永遠性、不滅性、不變性と共に永久に不滅でありまた不變である。

(六)

私の結婚観は大體以上のやうであるが、私は最後に男女結合の根本要件たる人格と、その人格に對する相互の理解、信頼、尊敬、愛慕即ち戀愛との關係を一言してこの稿を終り度いと思ふ。

既に結婚が當事者たる特定男女間の人格的結合なる以上、この二つの人格の間には出来る限り深く大きい精神的理解がなくてはならぬ。我等が我等の欲するが如き眞正の結婚に人格的結合の靈的基礎を求むるは、畢竟當事者間に斯種の深き精神的理解を得んが爲めである。即ち人格はもご純一なる人間性、獨自性を有する個性の基本なるが故に、その結合には當然相互間の精神的理解を要し、その理解の深ければ深きほご愈々益々その結合

が鞏固になるわけである。而して斯の如き精神的理解の漸次深まるに伴れて、ソコに當事者各自の人格に對する相互の信頼生じ尊敬生れ、やがて異性に對する一種不可言の微妙なる感情は、兩者間の熱烈なる友情を變じて遂に男女間に特有なる戀愛たらしむるのである。惟ふに戀愛の特性はその限定的なるこご恒久性にある。蓋し眞正の戀愛は、特定の人格者なる彼及び彼女の間に於てのみ存在し、而してまた戀愛は永遠性を有する人格相互間の精神的理解、信頼、尊敬よりのみ生じ得るものなるが故である。

斯く考へ來る時眞正の戀愛による男女間の結合ほご、心強くまた眞面目なものにてはない。かくして我等は——少くも眞に自己を生かし個性の成長發展を冀へる我等青年男女は、一切の精神的及び物質的犠牲を忍び、またあらゆる個人的、家庭的乃至社會的障礙を突破して、純眞なる戀愛に基く理想的結婚を實現せしめなければならぬ。然るに斯の如き我等の新結婚觀に對し大多數の我が同胞、先輩殊に父兄階級の人達は、固より何等の共鳴をも有せざるのみか、時に却つて之を危険視し尙ほ甚だしきに至つては我等を目して不健全、不眞面目呼ばりをする。如何に物慾に心迷ひ固陋なる舊思想に囚へられをる彼等はいはい、

純理上固より、我等の正當なる理想論に耳傾け、内心私かに之を是認してゐるのであるが、しかも尙ほ彼等はその心の弱さより、性格の不眞面目より、四圍の事情より、社會生活の情勢より、乃至は誤れる封建的思想より實行上、事實上依然として頑迷なる保守主義者である。彼等は我等を目して不健全不眞面目の青年なりと惡罵する。しかも彼等の多くは一方に於て世界無比の我が蓄妾制度を謳歌し、(敢て謳歌といふ。彼等の多くは藝者買ひ乃至蓄妾を以て眞正なる性的道德に反せざるのみか、却つて他人に誇示すべき事柄だを考へて居るのである。)少くも之を寛假しまた我國の驚くべき離婚統計に無頓着な人達である。此等の藝者買ひ、蓄妾制度乃至離婚數の夥多といふが如き社會的事實は、我等に果して何を示し何を教ふるものであるか。此等の悲しむべき事實は凡てこれ我國に於ける婚姻制度の缺陷、延いては男女道德の廢頽を最も皮肉に且つ雄辯に物語つてゐるものではないか。(過去及び現在の我社會に於ては、變態なる藝者買ひ乃至蓄妾の中に却つて眞の戀愛生活を見出す場合決して尠くはない。此等は最も明白に非人格的結婚の破産を暴露せるものである。)果して然らば我等は彼等と、何れがより不健全にして何れがより不眞面目であらう。

我等は寧ろ彼等の無智な、怯懦な、不純な心情を心より悲しみ且つ憫れまざるを得ない。しかも翻つて考ふるに、斯の如き反動思想は我が社會生活の到る處に未だく根強くその勢力を張つて居る。かるが故に我等は深く思想的に覺醒して、一方に此等の反動勢力と戦ひつゝ他方ドコまでも眞面目に大膽に高き最後の標的に向つて猛進し、一日も早く我日本の社會にも眞の意味に於て最も健全な純眞な性的道德を樹立しなければならない。而してこの大なる聖戰に榮譽ある勝利を獲得せんが爲には、我等は先づ何よりも青年男女の家庭的竝に社會的解放を要求しなければならない。しかも是れに關聯して幾多の考慮すべき重大問題あるも、既に豫定の紙數を超過せるが故に此等は後日稿を改めて更に公正なる識者の裁斷に俟つこころとする。

青年男女解放の必要

(1)

人間の足や車の轍の下に石のやうに硬く踏み固められてゐる路傍にも、こもすれば名も知れぬ雑草が青々とした新芽をふき出さうとする。一寸肉眼には見えかゝるほどの小さな小さな草花の二葉が、糸のやうな細い莖に満身の力をこめて、自分の頭上に魔の手のやうにぎつしり蔽ひ被さつてゐる土壌を一生懸命はねのけやうこしてゐる。自然の迫害到らざるなきシベリアの大雪原にも、春が来れば生々とした緑の野が展開する。氷河の痕跡を留めてゐる日本アルプスの高原にも、目覺むるやうな御花畑の樂園がある。

此等の根強い美妙な自然の巧みを目のあたり見また想像するこき、私の頭は其等の前に自づこ下つてくる。此等の事實の背後に潜める強烈な生物の「生存慾」の前に、私は涙ぐましいやうな祈りたいやうな心持ちにさへなる。

(1)

眼に見えぬ生命の成長を、何物もまた何人も拒むわけにはゆかぬ。凡ての生物は生きたいのだ、いふよりは生きなければならぬのだ。生きるこきを命ぜられてゐるのだ。而して現に生きてゐるのだ。それが何かの標準から見て善であらうこ悪であらうこ、彼等は凡て生きてゐる、生きるこきを命ぜられてゐるのである。それはもう區々たる善惡の問題ではない。形式的な倫理問題や道德問題を超越した大なる事實の或は存在の問題である。あらゆる生物中生存慾の最も旺盛なものは恐らく吾々人類であらう。少くも意識的に随つて積極的に、最も強くこの生存慾を感じてゐるものは吾々人類を措いて他にあるまい。この一點に於てそしてこの一點に於てこそ、吾々は人類の一人として生れて來たこきを創造の神に對し深く感謝しなければならぬ。

僅か一年の中に背丈が三四寸も延びた吾々の中學生時代は、はちきれさうな生命力が身體中の全細胞に充ち溢れてゐた。其頃の吾々は、一呼吸毎に背丈がいくらかづゝ延びてゆ

くやうな氣がした。寢てゐる間にも活潑な細胞の新陳代謝運動は、吾々の弾力性に富んだ肉體の全組織を時々刻々に變へつゝあるやうにも思はれた。其頃の吾々にまつて凡てが生命だつた。人々人々の間に温い「人間の血」が通つてゐるばかりではなく、人々一切の自然との間にも同じ「生物の血」が流れてゐた。山に緑が來れば、吾々の心にも若々しい緑が來た。野になたねが咲けば、吾々の胸にも黄色い菜の花が咲いた。小河の流れに春の囁きが聞えれば、吾々の頭にもかすんだやうな春の歌が聞えた。

そればかりではない。吾々は夏の海に、秋の月に、冬の雪に同じやうな生命の流れを感じた。背中から内臓を射通して、海岸の熱砂の上に横つてゐる吾々の肉體を燬き盡さねば止まぬやうなあの凄まじい八月の太陽の直射も、其頃の吾々にまつては何等の脅威でないのみか却つて温かい慈父の恵みのやうに思はれた。また静寂と沈思と悲哀と追憶と、其等のものゝ具象物たる秋の月そのものすら、其頃の吾々にまつては善いもの、美しいもの、楽しいものとして以外何等の意味もなかつた。冬の雪は其頃の吾々にまつて、最も親しいものゝ一つであつた。雪中行軍をして帽子をこつた毬栗頭からポツ／＼湯氣が立昇るさま、

林檎のやうな色つやのいゝ赤い熱した頬^ほべたに、五間先きも見えかねるほどの吹雪の大きな雪片がふりかゝる——その愉快さこそはなかつた。

其頃の吾々にまつて凡てが生命だつた。凡てのものに生々した生命の流れが見出された。そして吾々はその限り無き生命の流れの中に、人間と人間以外のものとの間の障壁を撤した大なる自然の一部として、仔鹿のやうに踊り廻つてゐた。實に其頃の吾々は詩そのものであつた。吾々の生活に於て、最も完全な生活即藝術の境地を發見するこゝができた。

『さう／＼春が來た！私の憂鬱は消えてしまつて、その代りに長くつゞき續いた夢見るやうな目的のない希望と憧憬^{あこがれ}が來ました。私の生活の形全體が變つてしまひました。私はソーニアと一緒にいそ／＼してゐました。私は今まで會てなかつたやうに音楽を楽しみました。私は新しい興味をもつて學課を勉強しました。私は緑の小徑を散歩したり、枝を擴けた樹の下に坐つて夢みたり、希望をかけたたり考へ込んだりしました——何故そんなこゝをしたかは、神様だけが御存じなのです。』

私は時々夜中^{よる}殊に月夜には窓の傍にゐました。また長い外套にくるまつて、カーチャが聞きつけないやうに靜かに家を抜けだしたり、露台を彼方^{あちこち}此方^{こち}うろついたりしました。時には露の中を池まで行つて、心を慰めるやうな花の靜さの中を、花園を見廻つて歸つて來るこころさへありました。(福永輓歌氏譯による)

これは有名なトルストイの『家庭の幸福』中の一節であるが、性に目覺め戀に目覺めつゝある處女の心持ちが、如何にもヴィヴィドリーによく言ひ現はされてゐる。

年頃の娘達にこつて、この世界は生命の世界たるこ同時に神秘の世界である。明るい希望、光明、憧憬の世界であるこ共に沈んだ哀愁、不安、焦燥の世界である。彼等は極度に悦びまた悲しむ。彼等は教室にある時も、書齋にある時も、電車の中でも、また家事の手傳ひに没頭してゐる時も、彼等の若々しい肉體中に起りつゝある不思議な生理的變化に自ら驚かされてゐる。彼等は彼等の中に漲れる大なる生命の神秘に、恐怖に近い一種の不安をさへ感じてゐるのである。

實に吾々は健全な處女の肉體を見るこころほご、人間の生の力を強く感得するこころはない。

其中には新しい生命がスウ／＼音を立てゝ成長してゐる。また其中には男子の場合に於けるよりも一層鮮やかに、限り無き未來の命が呼吸してゐる。あの夥多の血液と脂肪とに惱まされてゐる美しくしい處女の肉體を想像する時、吾々はソコに初めて此世における最高の藝術を見出したやうな崇美の感に打たれる。

(三)

私の『青年男女解放論』は以上の前提から出發する。

あらゆる人間は男女の別、年齢の別、賢愚の別、善惡の別、地位財産の別等一切の自然的並に人爲的差別を撤して一個の赤裸々な自然人として立つ時、彼には何よりも先づ「生存權」なるものが認められなければならない。これはもこより權利義務といふが如き單なる人爲的法則を以て律すべきものではないが、人間が人間として有すべき最低限の隨つて不可缺の生存要件として、各個人がその所屬團體の無條件的承認を求め得べきものである。殊に近代の社會及び國家は、其中に棲息せる各個人の生存を能ふ限り完からしむるに努力するこころを以て、所謂「法治國」の一大要件としてゐるほごである。現に我が民法第一條にも

「私権ノ享有ハ出生ニ始マル」この明文を掲げてあるが、立法者の意思竝に學者の解釋は如何様にもあれ、その根本精神に於ては、斯種の生存權を是認してゐるこゝ疑ふの餘地がない。何となれば帝國憲法第十九條に所謂「日本臣民ハ法律命令ノ定ムル所ノ資格ニ應ジ均ク文武官ニ任ゼラレ及其他ノ公務ニ就クコトヲ得」といふ公權はもこより、私權の享有の確認もこの生存權の是認を大前提とせざれば、何等の意味をもなさないからである。而して之れは態々明文を以て法律中に規定する必要のないほご、或は必要以上に、更に規定するを許さないほご明白な人生の第一事實なのである。

「吾々は生きてゐる。生きることを命ぜられてゐる。随つて吾々はその所屬團體に對し、それに必要な最低限の且つ不可缺の無條件的は認を要求するこゝ正当である」といふ私の生存權説は、その根本に於て不許不よりは存在の主張であり、理想乃至希望の是認よりは寧ろ事實の確認の要求である。随つて其間には非善惡の人為的價值批判を容るゝの餘地がない。即ちそれは「生き方」の主張にあらずして「生きるこゝ」の主張であり、第二義的の要求にあらずして第一義的の要求である。

以上の見地よりして私は、私の生存權説は斷じて危險思想と稱すべきものでない事を確信する。之を目して尙且つ危險呼はりするが如き者あらば、彼にこりては吾々人類の生存、やがて彼自身の生存そのものが一つの大きな危險となるわけである。

(四)

假令それは善であれ惡であれ、吾々は現實に生きてゐる。既に生きてゐる以上、その生存の意義を事情の許す範圍に於て能ふ限り明確にし、純化し、價值づけてゆかなければならない。人類の社會乃至國家生活に於ける凡ての改革改善事業は、その根本に於ては凡てこの生存の意義の確立に根ざしてゐるのである。

歐米先進諸國の近代文化史は、人類の解放運動の階梯として大體個人、階級、社會、國家、民族及世界の順序を経てゐるこゝを示してゐるのであるが、ひゞり我國にありてはこの一般的法則に反し、あらゆる解放運動の基調もいふべき個人的解放が未だ充分徹底して行はれてゐない。私は我國に於ける政治上、社會上の一切の不進歩を、凡てその個人的解放の不充分、不徹底に歸してゐる者であるが、現在の我が社會にありてこの個人的解放

の最初に要求せらるべきは、言ふまでもなく一般婦人殊に年若き婦人の生活に關してである。

一般婦人の生活の解放に關しては婦人職業問題の如き、婦人參政權問題の如き、或種の不公平なる法令の改廢問題の如き種々あるのであるが、年若き婦人の生活の解放について吾々の特に考慮すべきは、彼等の青年男子との自由なる或は必要なる交際問題、及びその高等教育問題即ち之れである。而して以下私の主として論究せんとするは、亦畢竟この後者の家庭的竝に社會的解放に外ならない。(私はこの論文に對して『青年男女解放の必要』なる標題を與へたが、以下本論に於ては大體婦人の立場を中心として議論を進めることとする。それは『青年男女の解放』といふもその大部分は婦人の解放に關聯し、また婦人の解放問題にして解決せらるれば、これやがて青年男子の同時解放を意味してゐるからである)

(五)

凡そ過去及び現在のあらゆる文明社會を通じて我國の婦人位没人格的、非合理的盲從生活に沈淪してゐる者にては他にあるまい。露骨に言へば彼等は物乃至は動物として、家庭

生活の羈絆に縛り付けられてゐるのである。物には生命がない、勿論人格がない。動物には生命はある、併し人格はない。しかも婦人は妻であり母であり下女である前、先づ一個の人間である。男子と同様の立派な一個の人格者である。この簡單なる説明は、從來の我が社會に於ける婦人の奴隸的地位を批難するに既に充分である。

この大なる不道德(實に人生に於ける最大の不道德である)に對し、長き過去の性的生活に於てあらゆる暴虐を擅にした吾々男子が、その一半の責任を分たねばならぬこと更めて言ふまでもない。併しそれと同時に、斯の如き男子の暴虐の下に、いつしか肉を賣り子を産むことを以て最も安全なる生活の方法なりと誤信し、更に進んでは我儘なる大多數の男子と共に、之を以て最高の婦徳と確信するに至つた婦人自らも、その一半の責任を負はねばならぬこと之れ亦こゝに喩々するの要はない。この責任の輕重は、能動受動の差及び行爲の分量より見て、或は男子の方を一層重しといふことができる。併しまた問題と當事者との關係及び行爲の性質より判斷して、婦人の方が當の責任者なりともいひ得る。而して凡ての問題の前に、先づ自己を思索し自己を省察することをして、あらゆる人間の第

一のつ、め、信じてゐる私の立場から言へば、自分自身のしかもその生存、生命に關する最重要の問題を他人任せにした一事によつて、この責任の過半は婦人自らの負ふべき性質のものである。

併しながら此等は既に過去の事である。而してこの論文の目的とする所は、過去の誤謬を指摘し批難することよりも、寧ろ現在乃至は將來の問題を考慮することである。(從來の非人格的結婚に對する私の批評については別項「男女結合の合理的基礎」参照)而して現在乃至は將來の問題を言へば、吾々の眼は當然多くの年若き婦人の上に向けられなければならない。

(六)

年若き婦人の解放問題を考ふる時最初に吾々の胸を打つものは、過去及び現在の我が家庭に於ける彼等の地位である。かのイブセンが有名な「人形の家」に於て婦人の個人的解放を叫んだのは既に四十年の昔で、爾後婦人問題は歐米諸國にありては他の政治上社會上の諸問題と同様急激の進歩を來し、その個人的解放は一轉して社會的解放となり、最近更

に政治的解放にまで進展して着々その成果を收めつゝあるのである。其故此點より言へば今日特に婦人の個人的解放を叫ぶが如きは、誠に時代遅れの甚だしいものと言ふべきである。現に我國に於てすら近時婦人問題として最も多く且つ眞面目に論議されつゝあるものはその職業問題であり、更に一步を進めたるものとしては、かの婦人參政權要求の問題がある。併しながら我國の凡ての文明がさうであるやうに、この婦人問題についても當然その根本問題として考慮せらるべき個人的解放が未だ充分に——こいふよりは未だ眞個に考へられてゐない。随つて實際生活上に於ては、一般婦人の地位は依然として封建時代の舊態を持續してゐるに過ぎない。かくしく私は今に於て寧ろ大いに、我が婦人の個人的解放を絶叫する必要があるのではないかと考へてゐるのである。

今日我國の年若き婦人がその家庭生活に於て如何なる地位におかれつゝあるか。少くも上中流の家庭にありては、彼等は依然ノラの所謂「人形」たるに過ぎない。彼等は學校に於ては、所謂良妻賢母主義の形式教育の下に、如何にしてより多く自己を殺し自己を抑壓

すべきかを教へられ、家庭にありては一切の事象に對して自己の意志、時には感情の自由なる發現をさへ許されぬ。彼等は朝夕たゞ父母の命するがまゝ、教師の導くがまゝに行動してゐるに過ぎない。彼等は一人で歩くことも、友人を訪問しまた招待することも、自分の欲する一切の修養並に勉強に志すことすらも自由に許されてゐないのである。斯の如き彼等に對つて異性との交際の如き、殆んど夢想するだに許されない不道德たるは言ふまでもないが、かゝる思想は今日果して是認さるべきものであらうか。私は暫くこの問題を考へて見たいと思ふ。

年若き婦人は「自ら生き」また「自らを生かさんとする」生存慾に於て、他のあらゆる人間と全然同一の立場にあること勿論である。而して斯の種の生存慾は彼等の中に眠れる性の目覺めと共に、必然異性に對する精神的並に肉體的欲求として現はれて来る。異性に對する此等の欲求はその根柢においては、即ち自ら生き自らを生かさんとする本能的（或は動物的）同時に意識的（或は人間的）生存慾の發現なるが故に、私の最初に繰返しく述べたかの「生存權」の立場より當然是認さるべきものである。而して私は此等の欲求を

私の所謂生存權の立場より考察することが、最も正當な且つ必要なことだと思へる。

既に異性に對する彼等の精神的並に肉體的欲求が少くも思想上、觀念上は認められたる以上、次に其當然の結果として異性との必要なる交際が許されなければならぬ。何となれば生存慾の發現としての異性に對する欲求はやがて異性との結合を豫想し、しかもその結合は「よりよく自ら生き、自らを生かさんとする」人間の本能の自然的歸結なるが故に必然合理的なるを要し、而して合理的結合は自己の配偶者としての異性に對する自由なる判断及び撰擇に基くことを要し、その自由なる判断及び撰擇は異性との必要なる交際によりて初めて可能なるを得るからである。

然るに過去及び現在に於ける我國の家庭生活にありては、年若き婦人に斯の種の生存權は殆ど全く認められてゐない。否消極的に認容せられてゐないのみならず、積極的に排斥し否認せられてゐる。而してこれもこより吾々凡ての人類が生きてゐることを排斥し否認せられてゐるに全く同様の悲惨事であり且つ不道德である。しかもこの問題に關して世人も婦人自らも案外呑氣のやうである。併しながらこの一般的無關心は、もこよりその問題の輕

小なるを意味せるにあらすして、偶々世人竝に婦人自らの無智、無自覺を立證してゐるに過ぎないのである。

今日我國上中流の社會に一般に行はれてゐる結婚に就いてみるに、男子は兎も角、女子には全然配偶者の「撰擇權」(假りにかく名付ける)なるものが認められてゐない。當事者たる彼女の意志は何れにあれ、先づ父兄乃至は媒酌人が相手の男子を定め、かくして多くは強制的に彼女を彼に娶すのである。しかも父兄乃至は媒酌人の配偶者撰擇の標準は大多數の場合地位財産の如き物的條件であり、やゝ進化せるものゝ雖も功利的見地を脱せざる所謂人物、才能といふが如き世俗的條件たるに過ぎない。斯の如き撰擇標準によりしかも最初より當事者たる彼女の意志を殆んど全く度外視して他人の決定せる配偶者が、意識的にせよ無意識的にせよ、自己内部の全心的欲求たる生存權に目覺めつゝある彼女にまつて、殆ど死そのものに値するほどの堪へ難き苦痛なる事は今更こゝに繰返すまでもない。私には多くの場合斯の如き結婚生活は、眞の意味に於て當事者たる彼及び彼女にまつて決して

幸福のものでないことを確信する者であるが(戀愛に因る結婚よりも斯の種の結婚の方比較的幸福の場合多しと斷ずる論者あるも、それは多く幸福の標準を極めて形式的に或は物質的に解釋しての立論に基づける誤謬である。尙又此點に關し吾々の特に注意すべきは論者の所謂戀愛なるものが大多數の場合、吾々の寧ろ排斥せる感情本位的舊戀愛觀に囚へられてゐるこゝである。——最後の附言參照)假令眞に幸福なるこゝありと假定するもそれは極めて少數の場合なるべく、且つまた結婚の如き重大問題を、試験の結果初めて肯定し或は是認する投機的事業と同一視するが如きは、實に不眞面目の極と言はなければならぬ。

(七)

世の所謂父兄階級の人の中には理論上吾々のこの正當なる要求を是認してゐる者尠くないのであるが、一旦實際問題となるや、彼等は舉つて頑迷なる保守主義者に逆轉するのである。彼等は吾々の主張するが如き婦人の家庭的解放は、今日の日本の社會にありては未だ尙早の嫌ひがあるといふ。然らば彼等の主張する尙早説の理論的根據は抑も那邊にあるのであるか。吾々も雖も勿論今日直ちに歐米諸國の社會に於けるが如き自由なる(我國の實情

に比して) 青年男女の交際を我國の社會に實現せしむれば、多少の弊害の之れに伴ふことを豫め是認する。併しながら凡ての改革、改善は一方に於て必ず多少の害悪を伴ふことまた止むを得ない。たゞ理論上眞に正當なることは實際上に於ても結局正當なること、歴史及び吾々の理性の承認する所なるを以て、多少の弊害は之を忍び全體としての大なる利益、幸福の中にそれを没入せしむべきである。

斯の如く彼等は本問題について尙早説を唱へ、その論據として今日の我國の女子の教養程度竝に一般社會状態を挙げ自由なる、(彼等の「自由なる」は吾々の「必要なる」と同意義) 青年男女の交際の如き危険至極なりと臆断する。併しながら彼等は本問題を考慮するに、餘りに彼等自身の立場に執着し過ぎてゐる。吾々青年男女は彼等の憂慮しつゝあるほご、しかく不道德でもまた不眞面目でもない。從來自由交際の結果として、多少悲しむべき事實の存せしこも吾々ももごより之を承認する。併し其等の事實は寧ろ彼等青年男女が從來の家庭生活に於て如何に窮屈な、不自由な、不自然な生活を強制されてゐたかを最も雄辯に物語つてゐるものである。即ち過去竝に現在の我が青年男女は、從來殆んど全く異性に

對する適當の理解も教養も授けられてゐなかつたため、偶々彼等に自由交際を許容すれば、精神的欲求を手ぬるしこし直ちに肉體的欲求に奔るのである。我國上、中流の家庭の子女が、多く最初に交際せし男子との肉體的關係を結ぶ傾向あるは、之れ亦異性に對し一切の正當なる判断及び自由なる撰擇を拒否しゐたる、誤れる過去の家庭制度の罪を見るべきである。

(八)

年若き婦人の家庭的解放を要求した吾々は、更に進んでその社會的解放をも要求しなければならぬ。而して斯の種の社會的解放の中心問題として考慮せらるべきは、言ふまでもなくその教育問題である。(一般婦人の社會的解放の中心問題は、寧ろその職業問題であるが年若き婦人殊に上、中流の年若き婦人について言へばその教育問題である。尙又一般婦人の場合にありても、教育問題は職業問題解決の根本要件とも言ふべく随つて一般的に婦人の社會的解放を論ずる場合、教育問題をその中心問題と見て毫も差支がない。) 女子教育問題中には、今日我國における高等女學校以下の所謂女子普通教育及び高等普通教育問

題をも含んでゐるこゝ勿論で、其等に關しても單に妻或は母としてではなく、一個の全人格として女子教育の立場より批評の餘地あるこゝ勿論であるが、こゝに私の主として論及せんとするは女子の高等教育問題についてである。

従來の舊家族制度並に舊社會制度の下に、殆んど人格者としての待遇を與へられてゐなかつた我國の女性殊に年若き婦人が、彼等の社會的解放の第一歩たる高等教育方面に於て、事實上全く其道を封ぜられてゐたこゝ、また現に封ぜられてゐるこゝもこゝより怪しむに足りない。頑迷なる保守主義者に言はせれば、「女子に高等教育を授くるが如きは實に不必要なるのみならず有害無益であり更に罪惡である。女子には女子の天分がある。而して女子の天分は言ふまでもなく人の妻として子供を産む事、人の母として子供を育てる事である。しかもそれは女子にのみ許された尊貴な天職である。然るに女子の高等教育は早晩此等の天分やがては美德を破壊する。これが人間相互の生活に於て有害無益であり罪惡でなくして何であらう。」

併しながら斯の如きは、婦人の問題を婦人自身の立場よりせずして、男子自身の立場より考慮せる全然利己的な思想である。

この思想の第一の而して根本的誤謬は、婦人にその正當なる生存權の是認を拒否してゐるこゝである。彼等は生きてゐる。生きるこゝを命ぜられてゐる。而してこの自ら生き、自らを生かさんとする、凡ての人類に共通な本能的同時に意識的生存慾は、彼等の若々しい肉體中にこそ最も盛んに燃えつゝあるのである。婦人の高等教育要求の聲は、やがてこの眞剣な生存慾の叫びである。彼等は他の凡ての人類と同じく、如何にしてよりよく自ら生き、自らを生かし得べきかについて日夜その小さな胸を痛めてをる。而してその最も有効な且つ手近な手段の一つとして、彼等の頭に浮んだのは即ちその高等教育問題である。この意味よりして彼等のその高等教育に對する要求は、至極合理的であり随つて正當である。即ちこの要求を拒否せんとするは、やがて彼等の生存そのものを拒否するこゝを意味しその根本に於て誤れるこゝこゝに事新しく述ぶるまでもない。

次にこの思想の第二の誤謬は、婦人を一個の全人格として遇せず、妻乃至は母といふが

如き部分的人格の中に押込めんとした所にある。婦人は何よりも先づ男子同様一個の人格者でなければならぬ。凡ての婦人は必ず妻或は母たらざるべからずこの思想は、常に理論上正當ならざるのみならず事實上に於ても支持し難い。吾々の周囲には妻或は母たらざる多くの婦人がある。また妻にして母たらざるものもある。妻たり母たることは、もよより彼等の最も自然的な且つ幸福な運命であるに相違ない。しかも妻たるも母たるもは、彼等自身の全然自由に取捨し撰擇し得べき問題である。(而して我國の過去及び現在に於けるが如き家族制度乃至社會制度の下にありては、眞面目に自己を考へ自己を愛する婦人は、寧ろ忌はしき結婚生活を回避せんとするの傾向さへある。それは勿論彼等にこりまた吾々にこり、やがては人類生活そのものにつて眞に憂慮すべき悲惨事なること言ふまでもないが、事實は事實として斯の如く進行しつつあるのである。)即ち彼等は妻たり母たることを辭するも、尙ほ一個の人間として生存するに何等の不都合もない。別言すれば彼等は妻たり母たる前、先づ一個の人間なのである。

最後にこの思想の第三の誤謬として擧ぐべきは、女子の高等教育はやがてその妻或は母

としての天分美德を破壊するに至らんとの危惧これである。勿論多くの保守主義者の如く妻或は母としての天分の内容を従來の囚はれたる見解に固着せしめんせば、女子の高等教育はその必然の結果として、斯の如き天分の内容を破壊し革新するに至ること勿論である。併しながらこれは決して彼等の憂ふるが如く、妻或は母としての女子の天分の破壊ではない。單にその革新であり進化である。即ち天分そのものゝ破壊ではなくして天分の内容の破壊である。而して斯の如きは吾々の寧ろ大いに望ましき所である。そのためにこそ吾々は聲を大にして、女子高等教育の必要を叫ぶのである。

(九)

之を要するに女子高等教育否認論者は、この問題を餘りに男子の利己的立場からのみ觀察してゐる傾がある。彼等の女子の天分といひ美德といふも、凡て皆男子自身の利己的立場より打算しての言で、それが果して婦人の立場より更に廣く人類の立場よりして、眞に天分なりや美德なりやは彼等の最初より關心せざる所であり、且つまた關心するを欲せず剩へそれを怖れてゐる所のものである。

この利己的な男子の否認論の全體を通じて吾々の特に注意すべきは彼等は意識的に或は無意識的に、高等教育に因る婦人の覺醒を極端に怖れてゐるこいふ一事である。これは吾々の思想の傾向よりすれば殆んど諒解に苦しむほどの奇異な事實であるが、彼等の否認論の根柢には斯の種の恐怖心が力強く作用してゐることは争はれない。然らばそれは何故であるか。高等教育を受ければ婦人が精神的に覺醒する。婦人が覺醒すれば、自己の周圍に對して從來以上に嚴正なる批評的態度をとり、その結果凡ての事象に對して著しく懷疑的となる。彼等はやがて過去の盲動的、他主的奴隸生活を棄て、自覺的、自主的人間生活を撰ぶ。彼等は既に他人より「命ぜられたり」この單純なる理由のみを以てしては、それを絶對の權威あるものは考へ得ない。

彼等はもう精神的に去勢された無意志、無感情の「人形」ではない。他人の意志、感情に自己の意志、感情を盲從的に没入せしめて安閑にしてゐられない。他人が一事を主張し或は命令すれば先づ自己自らの自由な意志を判斷しに基いて其等の果して合理的なりや随つて正當なりや否やを檢し、然る後認すべきは是認し否定すべきは否定するのである。

斯の如き婦人の覺醒は、從來の不道德なる性的生活に於て殆んど暴君の如き不當の權勢を擅にしてゐた大多數の我が男子達に於て、最も怖るべき一つの脅威たるこい言ふまでもない。併しながら政治上、社會上に於て既に多くの専制者、特權階級者の倒壊せるこいごとく、性的生活の世界に於ても早晚、斯の如き暴君の没落せざるべからざるこい寧ろ自然の大勢である。而してそれはまた營に悲觀し恐怖すべきものにあらざるのみならず、眞に健全な幸福な新しき性的生活建設のために、却つて吾々の心より悦び且つ歡迎すべきものである。婦人にこりてはもこより、男子自身にこりてもその眞面目なる精神的覺醒のため大いに慶賀すべきこである。尙ほまた比較的功利主義の見地よりするも、斯の如き婦人の覺醒は、次代國民の養育上大いに望ましきこい言ふまでもない。

(10)

今日吾々青年の立場よりして最も遺憾に堪へないこは、吾々に於て將來眞實なる人生の伴侶たるべき若き我が婦人の多くが、一般教養の點に於て著しく男子に劣つてゐるこである。悲しいけれどもまた淋しいけれど、吾々は所詮この事實を事實として認容しなけ

ればならない。

吾々の求むる男女間の結合は、従來の非人格的のそれにあらずして、合理基礎的の上に立てるものなること改めて言ふまでもないが（別項『男女結合の合理的基礎』参照）斯の如き合理的結合を得んがためには、吾々は男女相互間に出來得る限り深き大なる精神的理解を求めなければならぬ。また求むることに努力しなければならぬ。而して斯の種の精神的理解の獲得は、前述せし若き婦人の家庭的解放の如き第一段に於て必要な條件であるが、更に第二段に於て吾々は、その社會的解放の結果たる高等教育の力により、婦人の一般教養の純化向上を期しなければならぬ。

吾々はもう自己の配偶者を一つの動物、尙更無生命なる一個の物或は道具として取扱ふ不道德の生活には堪へられなくなつた。吾々は相互ひに同じ人格者として、相扶け相勵ませつゝ正しい人生の道を辿りたい。吾々は自己の配偶者を單に料理人、裁縫人、保姆乃至は女中としてのみ遇するほどの道德的無感覺者になり得ない。尙更奴隸、賣女として取扱

ふの怖ろしさは淋しさに堪へ得ない。吾々は個人的、家庭的、國家的更に進んでは國際的問題について、同じ一つの大なる生命の共有者として同様に苦しみまた悦びたい。一方が何を考へ何を行ひつゝあるかを他方が知らず、知らうともせず、知ることを欲せず、また知らしめざるが如き、同じ一つの世界に呼吸しつゝある吾々にまつて想像することすら堪へ難きことである。二人は或る種の心の隔りを有ちつゝ、各自別々の世界を歩いてゐる。しかも彼等は、少くも形式上に於ては、何等故障なく圓滿に家庭生活を續けてゐる。別々のことを考へ、別々の悩み、苦しみ、悦びを胸に感じつゝ、彼等は同じ一つの屋根の下に、同じ一つの食卓につき、同じ一つの部屋の中に起居を共にしてゐる。あゝ併しそれは何たる恐ろしい事實であらう。彼等は精神的には、既に終局的破滅の悲劇の中に立つてゐるのである。

吾々はさうかしてこの恐るべき人生の悲劇から逃れたい——さいふよりは最善の努力を盡して是非とも逃れなければならぬ。而してそれがためには、男女相互間に一層大なる精神的理解あるを要すること勿論であるが、この理解を助長し促進せしむるに最も有効な

手段は、婦人の高等教育を盛んにし、彼等をして凡ての政治上、社會上、思想上の問題に對して吾々同様の理解と興味を有せしめ、かくして一般教養の點において男子と、同じ世界を同じ歩調を以て歩み得るやうにすることである。これには勿論、政府の女子高等教育機關の増設乃至は保護、一般識者殊に父兄階級の本問題に對する態度の更新、吾々青年の對女性觀念の根本的革新等何れも重要に相違ないが、此等の何れにもまして絶對的に必要なことは、言ふまでもなく婦人自らの深き思想的覺醒そのものに外ならない。この意味に於て今後の年若き我が婦人は、自己建設のために、やがては新生活、新社會樹立のために、血と涙のにぢみ出るほどの男々しい人生の戦を闘はなければならない。併しながら彼等の前途には大なる希望の星が輝いてゐる。その星の光の下に彼等はやがて、吾々と共に新しき人生の勝利の歌を唱ひつゝ、その努力に光榮の過去を顧みて心より若き微笑ほほえみの聲をもらすであらう。

(二)

私は以上簡單ながら「青年男女解放の必要」について私の言はんことを欲する所を大體言ひ

得たつもりである。

而してこの問題に對する私自身の態度は、世界及び日本の將來に對すると同様、大體に於て先づ前途の光明を認めてをる。私は吾々の周圍に於ける一般の政治生活及び社會生活が、日に月に漸次明るくなりつゝある事實を感じしてゐる者であるが、性的生活の方面に於ても亦私は、大體の風潮が吾々の希望しつゝある方面に向ひつゝあることを感ぜざるを得ない。唯併し吾々は斷じて、之を單なる自然の成行に一任してはならぬ。吾々はこの大なる聖戰場裡に於ける戰士の一人として、最後まで眞面目に勇敢に闘ひ通さねばならぬ。何事に限らず吾々は、眞面目なる努力なくして之れに對する報酬のあるべからざること、深く心に覺悟せねばならない。

「女權論者の憧がれ求めてゐる自由は、婦人の婦人としての特殊な、また特別な仕事の遂行に伴ふ注意並に義務から逃れることでもなく、尙又母性の榮譽ある責任並に深き苦惱、即ち全世界に於ける最も偉大な職業たる種族の生産及び養育から自由にされること

でもない。彼女の求むる所は、性的業務に何等關係なき天分の運用竝に精神的（靈及び心）能力の使用における婦人の自由である。彼女は婦人の趣味を強いて一つの道に押込めることに反對する。また婦人の人格を一定の方向に抑壓することに、特に秀れた素質あるにも關はらず、婦人の感情を同一傾向に向はしむることに、婦人の才能を一つの事業に制縛することに反對する。』

私は『女權運動』の著者スノーデン女史のこの味ふべき一句と共に、更に『婦人運動の將來』の著者スワンウィック女史の教訓的な左の一句を引用してこの論文を終り度いと思ふ。

『彼等（最も賢明なる教育家達）はかう考へてゐる。人類は、相互にまつて欠くべからざる二つの性に進化し來つたのであるから、彼等が相互によりよく理解すればするほど、彼等相互の間の同情及び協力が一層近密になつて來る。其故性の分離は宜しくない。また一つの性が他の性に盲従することもいけない。何となれば奴隸所有者は決して眞に奴隸を知り得ず、また一方奴隸がその主人について有する知識は、悲しむべき結果を持來

すからである。』

附言

私の女性觀、結婚觀乃至婦人解放論に對しては（一）兩性の絶對的解放論の立場より（二）社會主義的思想の立場より（三）舊來の非人格的結婚觀の立場より、夫々有力なる批評乃至反對説の提起せらるゝこと、私のもこより豫期してゐる所である。私は以下簡單に、此等三種の批評乃至反對説に對して豫め私の意見を述べておく。

第一に、此等の問題に關する私の議論は、現代の文明社會において、少くも最も合理的と看做され随つて正當視されつゝある一夫一婦制をその出發點とせるものである。道徳内容乃至標準の絶えざる進化、變轉を是認し得る私にまつて、一夫一婦制の如きも固より萬代不易の人倫則であることは考へられない。一夫多妻制も一妻多夫制も或る社會、或

る文明、或る時代に於ては今日の文明社會における一夫一婦制の如く合理的を看做され随つて正當視され得べき可能性を有するものである。併しながら現在の私には種々の點より考察して從來の一夫一婦制が、少くも人間社會における男女結合の形式として、最も合理的に随つて正當を考へられる。(私は徹底せる社會主義、共產主義の社會にありては、私有財産制の大前提も言ふべき家族制度の撤廢、随つて極端なる夫妻共有主義是認の必要を豫想する者である。此點よりして現在の私は斯種の社會主義、共產主義に對して未だ賛意を表し得ない。)

第二に、私の議論は今日我國に於ける上中流の社會(中流社會中には吾々の如き智的勞働者にして同時に無資産階級者をも含む)を基礎として立論したものである。随つて肉體的勞働を唯一の生活資本とせる貧民階級の婦人に最も必要なる職業問題の如き、最初より之れに觸れることを避けた。之れはもより彼等の婦人としての地位を度外視し、尙又それを輕視せんとしたからではない。唯併し此等の男女問題に關しては彼等は多くその社會的因襲乃至傳統に囚はれず、又囚はるゝ必要少きを以て彼等の社會にあり

ては、所謂上中流の社會に於けるよりも却つて凡てが合理的に取行はれてをり、随つて此等の問題に關し比較的論議するの必要を感じないからである。併しながら他の一方より言へば職業問題の如き、必ずしも彼等の社會にのみ限られた特殊問題ではない。吾々はその無資産の點に於て、また生活上常に最小限度の保障なき點に於て、彼等と全く同様の不安定な地位に在るものである。其故或る點より言へば吾々の社會にありてこそ、男女殊に婦人の職業問題が一層重要視さるべきである。併し私は普通の智力、體力の所有者はその精神的乃至は肉體的勞働によりて、必ず自己の生計を維持するに足るだけの必要なる収入を獲得し得るものと信じてをる。之れは勿論一定の勞働(精神的並に肉體的以下同じ)に對しては必ずそれに相當する報酬を與ふべき公正なる社會組織の確立せる事を前提條件としてゐるのであるが、それと同時に吾々に於ても、心身の適當なる發達に必要な以外、出來得る限りその生活を緊縮せしむるに努めなければならぬ。而して吾々の勞働に相當する必要的報酬の保障は、他の精神的或は肉體的缺陷に因る先天的勞働不能者、疾病、老年、天災、失業等主として不可抗力に因る或は勞働者自身の意志

に基かざる後天的労働不能者の場合に於けるに同様、當然國家乃至社會の是認を與ふべき性質のものである。この意味に於て私は徹底せる國家社會主義の信奉者である。かくして現在の私に於て、少くも我國の社會における婦人職業問題は、その精神的及び思想的解放問題以上に緊切な且つ根本的なものは考へられないのである。

最後に私の女性觀、結婚觀乃至婦人解放論に對しては舊來の非人格的結婚觀の見地より相當有力なる反對説を豫想し得る。此中地位財産の結婚即ち私の所謂政策結婚の立場よりする反對説に對しては、その根據の薄弱なる點より何等應答の必要なきを感じる。其故こゝには主として肉の結婚、即ち所謂性慾結婚論者の反對説に對してのみ私の意見を述べるこゝとする。此等の論者に對しては私は先づ、私の立場は徹頭徹尾人間的であるといふ根本條件を認容せられんことを望む。私は勿論或る程度に於て、ダーウイン以來幾多の學者及び思想家によつて研究し思索され來つた、生物進化論の事實並に眞理を是認する者である。併しながら私のこの是認は、到底「或る程度」以上に出づることできない。私に於て、少くも現在の私に於て、人間が果して猿族より進化し來つた

ものであるか否か、また「人間と高等動物との間にはその心的能力に於て何等の根本的差異がない」ものであるか否かといふが如き生物學的起源論及び斯種の起源論に基づく人間社會の生物學的説明は多く問題とするに足りない。私はただ其起源乃至種類に於ては假令同一の物であらうと、その起源乃至は種類に「或種の過程」が加はれる結果として吾々の眼前に示現せる嚴然たる現實の事實より歸納し、人間と人間以外の一切の生物との間に、かなり甚だしい程度の差乃至は純然たる種類の差を認めんとする者である。その「或種の過程」は言ふまでもなく多くの心理學者、社會學者等の所謂「人類の共同生活に因る高き社會進化」そのものに外ならないが、この「共同生活」乃至「社會進化」自體がその出發點に於ては假令單なる程度の差であれ、今日の實情より考察すれば既に程度の差の最高限を突破して、殆んど種類の差にまで進轉してゐるのである。この意味よりして私は「國家の博物學」の著者エッチ・ジェー・フォード教授の所謂「ダーウイン以來の研究の結果は、常に似人類と人間との間のギャップを橋渡しするに足る材料を供給しないのみならず、寧ろそのギャップは最初想像せられてゐたよりも一層廣い

こいふ事を示す傾きがある。』こいふ社會現象の反生物學的説明に賛同せんとする者である。而して一般社會現象の分野に於ける私のこの人間的な立場は、その女性觀、結婚觀乃至婦人解放論に於て最も執拗に且つ明白に主張せられてゐるのである。私は勿論性的生活に於ける性慾の力の根強さ、種族保存の自然的本能の重要を輕視し尙更之を否認せんとする者ではない。(別項『男女結合の合理的基礎』参照)併しながら私はドコまでも性的生活に於ける人間と人間以外の一切の生物との間の根本的、本質的差異の存在を確信せる者である。而してそれは即ち私の所謂「人間的本能」の有無によつて最も明白に表示されてをる。人間的本能は動物的本能の自然的、盲目的、衝動的なるに反し意識的、有意的、理智的である。即ち結婚生活における人間的本能とは結婚の目的、手段及び相手方等に對する意識的、有意的、理智的判斷そのものゝ謂である。過去竝に現在を通じて吾々の周圍に見出さるゝ殆んゞ凡ての結婚生活は、何れも戀愛生活との悲慘なる不合一をあからさまに表白してをる。併しながらそれはもこより、この二つの生活の根本的にまた永久的に相合致せざるべきを實證せるにあらずして、寧ろ本問題に對する吾々の

無智、不眞面目及び努力の不足を最も皮肉に物語つてゐるに外ならない。新しく目覺めたる吾々は既に／＼盲目的、衝動的感情によりてのみ支配せらるゝ舊式の戀愛觀には到底満足し得られなくなつた。吾々の信奉する戀愛觀念の内容は、夙に意識的、有意的なる理性の世界にまでも擴大せられてをる。舊式の感情本位的戀愛觀よりすれば、吾々のこの新しき理性尊重戀愛觀(決して從來の感情本位的戀愛觀の全部を否認せるものではない。唯その所謂感情の範圍を擴大し、内容を一層自由に解放したまでである。)は或は時に不純とも見られ、また危険視せらるゝ虞あるかも知れない。併しながら其等は決して吾々の新戀愛觀そのものゝ罪ではなく、却つて因襲に囚はれ、形式に泥める舊戀愛觀自身の責任である。以上述ぶるが如く、私の戀愛觀は從來のそれに比し著しく意識的、有意的、理智的分子が加はつて來てをる。随つて私は戀愛と結婚との間の根本的永久的不合一を信ずることができない。寧ろ私は從來この二つの生活の間に躡つてゐた悲しむべきギャップは、最も露骨に囚はれたる感情本位的舊戀愛觀の破滅を自ら確説せるものであると考へる。

(一九一九年三月)

雪の朝

八日の正午頃からちらつき初めた雪は、夜ねる頃にはもう一尺近くにも積つてゐた。

日曜の朝といふ心持ちは、吾々のやうに殆んど時間の束縛をうけないものにも、何さなくのんびりした感じを與へる。毎朝私の洗面場にゆく時分には、もう影も形も見せない同宿の大學生や勤人も今朝はほこ／＼暖かい床の中で、思ふ存分一週間の勞れを忘れてゐる。しい。學生時代、普通の日には兎角寢坊して學校の時間におくれがちだつた私も、日曜の朝は不思議にはやくから眼がさめた。

九日は恰度日曜日にあたつてゐた。土曜の晩が廻つてくるさ他の下宿人同様やはり手足のさき／＼まで、湯加減のいゝ風呂に入つたさきのやうな、ゆつたりした氣分の漲つて來るらしい女中達も、雪の朝の静けさに、今朝は八時過ぎまでも廊下の遣戸を開ける音がない。三四十分も前から眼をさましてゐた私は、戸の隙間からもれてくる光線の輝きに

雪の朝

「今日はいゝ天氣だな」さひりで上機嫌になつた。

私は雪の朝はたまらなく好きだ。床の中にも自づこ感ぜられるあの譬へやうもない明るさ、張り替へたばかりの眞白な障子紙に反射して、鬱陶しい雨の日なきには茫乎ぼんぼんさしが見えない天井板の木目もくもまでが、一つ一つ數へられるあの心持のよい自然の明るさ—こんな朝かやつて來るさ私は、降り積んだ雪の中に平氣で顔を埋めたり、或は其上を如何にも樂しさうに、一人で轉け廻つてゐる小犬のやうな子供らしい嬉しさを感じる。何だがじつさしてはゐられないやうな、何かしすにはゐられないやうな、そんな心のむづ／＼しさを感ずる。

「東方は人を待てり」さ叫んで、自らその東方帝國の大皇帝たる日を夢みてゐたナポレオンは、アラビヤ荒原の砂漠地方に漂へるあの焦々いらくしい陽炎かげらふに對して、殆ど狂的な憧がれを有ち、Napoleon といふ自分の名を『砂漠の獅子』(The Lion of the Desert) として解釋してゐたさこのことであるが、私の雪に對する—さいふよりは雪の朝に經驗する一種不可言のすがくしい、同時にそわ／＼した感情は、假令ソコに砂漠の陽炎に對するナポレオンの狂

熱はなくとも、更に純真な更に本能的な子供の悦びがある。
私はもういつものやうに、床の中で愚圖々してゐられない。女中が騒々しく戸をあけ初めるや、私はガバガバ元氣よく跳ね起きた。

□

雪は否應なしに私を十代の、或はそれ以前の少年時代に伴れ戻す。

私の生國は雪國ではなく、さちらか言へばむしろ暖い方であるが、海拔二千尺に……
私の村は、南國にしてはかなり寒い方であつた。私は今でも未だよく覚えてゐる。

雪の降る分量は村のひらけるの人間の殖えるのこで、毎年いくらかづゝ減つてゆくやうだが、私達の小學校時代は、往來でも二尺三尺積るこが珍らしくなかつた。村の子供達は歌舞伎芝居の小者のやうな裾無しを着たり、安ッほい赤地の紀州ネルにすつほり頭を包んだりして、フウ／＼眞白な息を吐きながら、鼻のてつぺんや、頬ぺたや、手の甲を眞赤にして、それでもいそ／＼元氣よく學校へ通つた。

私達の家は、河に沿ふた東西に細長い村の東の方にあたつてゐたので、學校では所謂

上組カミグミに屬してゐた。上組の生徒は概して村での中以上の家庭に育つた者が多かつた。下組シモグミの子供達は、外見よりも實利を尊んでゐたので、防寒具としていろんなものを身體にくつつけて來た。その中には、雪國で一般に用ゐられる「もんべい」或は「たツつけ」(私の村では普通「はかま」ハカマといひ、大人殊に年寄のはく、ぶく／＼したものを「ふんごみ」フンゴミと呼んでゐる)もあり、またふく／＼暖かさうな藁靴や、獵師なごのよく穿くなめし藁皮の靴もあつた。私達はさうかしてその「はかま」や、藁靴や、藁皮の靴を穿いてみたかつた。此等は大人の物として眺めたとき、その馬鹿けて大きいこまや、その不調和から受ける悪格構な感じは、當時の私達をして却つて厭な、時には腹立たしいほどの想ひをいだかせたにも拘はらず、子供の物として見返したときその小ぢんまりした形、その形からうける可愛らしさの情は、私達を極度に惹きつけずにはゐなかつた。

私達は、隣りのAチャンも向ひのYさんも、新しく「はかま」をつくつて貰つたのだから、私達にもつくつて下さいと何度もなく母にせがんだ。併しその都度「あれは大人のはくもの、貧乏人のはくもの」として一向きり合つてくれなかつた。なるほご其等はたしかに

「貧乏人のはくもの、下品なもの」であつた。併し私達は、貧乏人でも下品でもない、兎に角「はかま」や鞆皮の靴をはいてみたかつたのである。

それからこんな事も覚えてゐる。

其頃私の村の小學校はまだ障子張で、吹雪の日なきひさい温氣でじつと黒く、しみのついた障子紙の破れから、ヒュー／＼調子の高い音を立て、山上嵐が吹き込んで来る、その寒さささいつたらなかつた。しかも防寒の設備さいつては、僅かにガランとした大きな教室の兩隅に、カン／＼おこつた炭火の大火鉢が二つおいてあるきりで、書いてゆくうちにも筆先きの凍てつくやうな土地の寒さに對して殆んど何の用をもなさない。ソコで子供達は銘々自分の家から一握みほぎの木炭を薬で縛つて来てそれを片手にさけ、他の片手には烏帽子型の黒い土の火鉢を抱へて學校へゆく。そしてその火鉢を自分達の服の間に入れて、漸く寒さを凌いだものである。小使一人ゐない學校のこまゝで、朝教室に火をおこす當番に當つた者は、ほかの子供達より半時間も前に學校へ出なければならぬ。そんな時私達は、

小さな火種を薬で縛つた例の木炭の上に載つけて、フウ／＼吹きつゞけながら學校まで行つたものだ。

またこんなこゝもあつた。

もう十七八年前、病氣で亡くなつた私の従弟は、七八つの頃から他の子供達より圖抜けて大人びてゐた。それだけ身體も弱かつた。或日——それはひさい吹雪の日であつた。私は彼と一緒に股まで没するやうな深い雪道を學校へ行つた。弱い従弟は途中で歩けなくなつた。小さいながら（其時私はたしか尋常の三年で従弟は一年生だつた）私は彼を自分の背に負つて、轉び／＼／＼學校まで行きつゝいた。

それからまた別の日、私は學校の歸りに校庭の柵の外の石垣から、何氣なく往來の雪の中に飛び込んだ。その雪は思つたより深かつた。足の裏が地についた拍子に眼をあげる、私の小さな體軀はすつほり雪の中に埋まつて、頭の上にまだ一寸ほぎ雪が蔽ひかぶさつてゐる。私はあらん限りの大聲あけて、漸く先生から助けて貰つた。

私達はまたよく雪遊びをした。その中最も大袈裟なものは所謂「城」をつくることだつた。

往來の真中に一間四方ほどの地を相して、そこに城の土臺を据ゑる。土臺には近所の水分臺から、直径一尺長さ四五尺にも餘る大きな氷柱をきりこつて、それに荒繩をしぼりつけ二三人の子供が雪の上を這らして持つて來る。土臺が出来上るに今度は其中に、父や兄に作つて貰つた白木の羽子板で、一生懸命雪を投げ入れる。雪の間には氷柱の破片を叩き込む。かくして段々四角な雪の城廓を築き上げ、高さが三四尺にもなるに、それに階段をつけて頂上に登れるやうにする。頂上には未だ雪の固まらぬ中に、紙製の日章旗か何かを目印に立てておく。夕方子供達纏がよりでこの城に水をぶつかける。翌朝起きてみるに、城全體が氷のやうに硬くなつてゐる。他の子供達もまた同じやうな城をつくる。そして二つも三つも城が出来上るに、今度は雪合戦を初めて城を占領し合ふ。夜になるに城の四壁にあけてある五寸四方ほどの穴に小さな蠟燭を立てる。遠くから見るに雪の壁をもれて來

る。その蠟燭の光がたまらなく美しい。

私の中學二年の時、八十二の高齡で亡くなつた百姓すきの私の祖父は「えーい糞ツ！ 鬼共等、またこんなものつくりやがツて。こんなことすつから春先きまで往來の雪が解けないんだ」こつぷやいては、河向ふの自分の納屋からよく光つた備中鍬を擔ぎ出して來て、片ツ端から私達の「雪の城」を壊して廻つた。

其頃私の村では冬になるに猪や、鹿や、熊や、に、く、や、狼なごの野獸がゐれた。

私達の祖父や父の子供時代には、山に近い畑の作物を荒しに來た猪や鹿が、犬や村人の包圍攻撃に逃げ道を失つてうっかり町中に飛出し村中を鼎のわくが如く大騒ぎに騒がせたものださうだ。私達の子供時代にはもうそんな物語りめいた出來事はなかつたが、それでも村の何某がつひ河向ふの野原で大熊ミミツつかみ合つて大立廻りを演じた、所が幸ひな事に其男のネルの頸巻がさうかした拍子に熊の顔に覆ひかぶさつた、ソコで其男は素早く腰の山刀を引抜いて敵の月の輪を衝刺し、相手のやゝ弱つたのを見計つて命からかく逃げ

歸つた、翌日村の獵師達が雪の上に點々たる血痕を辿つて熊の穴をつきこめた所、その奥の方から苦しげな野獸の唸り聲がもれて來たので、早速その穴の中へ鐵砲を打込んで件の大熊を射止めた、——こんな話もある。その熊は間もなく前の男の家の、往來に面した板の間に俯向けに寝かされてあつたが、其頃の私達の眼にはたしかに六疊の間一杯ほきの大きさに見えた。

そのほか村の或る男が山仕事に出掛けてゐた時、突前その後から一頭の親猪の襲撃にあつたが、大力の其男はうまく背負投げを喰はせて、野獸を一丈も餘る崖下に抛り投げやうにした途端、誤つて野獸諸共自分も崖下に墜落して大怪我をしたといふ話。村のすぐ近くの雜木山に小牛のやうな大鹿が出た、それが數人の獵師と獵犬との挾撃ちに合つて逃げ場を失ひ、さうく四五十尺もある高い斷崖から飛下りて、脚を折り頭を粉碎して即死したといふ話。村から一二里離れた或る山の中で一疋の大猪が、血を見て殆ん狂つた。深い雪の上にドス黒い血の滴りを垂せながら全山を阿修羅王の如く荒れ狂つ、といふ話。また或る老練な一人の獵師

が村から五六里もある深山へ猪獵に出掛けて行つた所、二十間隔たつてゐない自分のすぐ前の栗の太木の根元に、何か餘り大き過ぎぬ一つの黒い塊が見える。何だらうと少し近づいてよく見定めると、それはまごふかたなき一頭の狼だ、流石斯道にかけては玄人の彼も狼ごわかつて、その瞬間全身の血が頭に逆上し、そのうへ氷のやうに凝結してしまつたやうに慄つした、併し老練な同時に膽力のすわつた彼は直ちに氣を取り直して、十歩程後の杉の木の蔭に身を隠し、獵師仲間では俗に念佛彈丸と呼んでゐる最後の一彈（これは危急の身に迫つた場合、自分の生命を救ふために發する最後の彈丸で、これによつて如何なる危険をも脱れ得る代り、一旦之を使用すれば彼は以後もう獵師を廢業しなければならぬと言ひ傳へられてゐる）を銃にこめて、少時瞑目念誦した後じつと息を殺し狙を定めてズドンと一心こめて引金を引いた、其響は死そのものゝやうな深山の寂寞を破つて、やがて虚空に消え去つた。そしてそれと同時に、栗の太木の根元にすやく假睡の夢を食つてゐた例の猛獸は、血煙り吐いてそのまゝ絶命したといふ話——こんな冒險的なこわ面白

い「獵人談」は、其頃の私達の小さな胸を、獵人生活に對する一種の好奇心でわくわくさ

せたものだつた。

私は今でもよく、凱戦將軍のやうに勝誇つた血氣盛りの若い獵師達が、五頭も六頭も大小の野獸を太い棒の真中に倒さに吊し下けて、山の方から村へ歸つて來るあのグロテスクな光景をまざざと頭の中に描き出すことができる。眞白な雪の往來に滴り落ちる腥い野獸の血を嗅ぎながら肉々しい、貪婪な、慘虐な形相をした多くの獵犬が、もう血にも肉にも飽き果てたこいふ風に、そこいら邊を懶くうろつき廻つてゐる——あのエキゾティックな場面が、少年時代の自分の生活と共に鮮やかに思ひ浮べられる。

□

長い冬のこの家でも、一と抱へほごもあるやうな太い櫓の燃えさがる圍爐をかこんで櫓火の上に吊された、煙で眞黒に焦けてゐる大藥罐のシャンと賑やかな音を聞きつゝ、年寄の昔噺や、話上手な召使ひ共の世間話に時を過すのが普通だ。十二時近くにもなる遠い下の方から、鳴子の音につれて『火の要オーヂーン』といふ夜廻りの聲が聞えてくる。『おーの夜番が來た。さアもうみんな寢やうや。』夜番がまわつてくるに必度誰

かどかう言つて、家内中がそれごと自分達の部屋へゆく。

私は未だにあの淋しい夜廻りの聲を、鳴子の音を忘れることができない。『火の用オーヂーン』——凍つた往來の上を、細く悲しげに流れてくるこの夜廻りの聲を聞く度に、小さな私達は知らず母や姉の膝元ににぢり寄つた。

(一九一九年二月)

勞働者と或る青年との對話

場所。電車の曲り角にある新設の簡易食堂。

時刻。寒い雪解けの日の正午頃。

青年。二十七、八、高等教育を受けた若者らしく、縞の折襟に黒羅紗のオーバーを着て相當すつきりした服装をしてゐる。

勞働者。年の頃四十五六、身體は屈強で普通の勞働者よりどこか品のよい所もあるが、頭髮も頬鬚ものび次第、餘り血色のよすぎぬ顔に不調和と思はれるほどの兩眼が底氣味わるく光つてゐる。

I

勞働者——(つゝ自分の席から立ち上つて青年のゐる方へ進みより、彼に向ひ合せてドカミ床几に腰を下す。そして青年に對し無遠慮に話しかける) 君は一體こんなまけ何しに

來たんだ?

青年——(思ひがけない勞働者のこの一言に、神經質らしい顔を急に曇らせてきつこ話しかけられた方に向きなほる) 何しに僕はこゝへ晝飯を食べに來たんだ。

勞働者——晝飯を食べに來た……嘘ツつけ。遊びに來たんだらう。オイ君。ソんなに晝飯を面しなくツたつていゝぢやねエか。

青年——(餘りの暴言に黙つて相手の顔をじろく眺めてゐる。……)

勞働者——(相手の迷惑なきには一向頓着なく) さうだ君。俺の言ふことア間違エはあるめエ。君がこけエ晝飯を食ひに來たんだア、そりや眞赤な嘘の皮だ。

青年——(ひさく憤然として) 君は何ていふ無禮な男だ。仲間同士でもあるまいに、もし相手を見て物を言ふがいゝ。殊に初対面の僕に向つて頭から「嘘ツつき」は何事だ。僕は今こゝで、君に對して何一つ嘘をついた覚えはない。僕はたしかにこゝへ晝飯を食べに來たんだ。現に君のすぐ眼の前で、かうやつて飯を食つてゐるぢやないか。

勞働者——(聊か嘲笑的の口吻で) オイ君、さうムキにならねエでもいゝよ。君は案外正

直な男だ。だがその正直ツてエのは、俺から「嘘ツつき」ツて言はれて未だ腹を立てるだけの腐らねエ根性をもつてるこいふだけのこツて、「嘘ツつき」はドコまでも「嘘ツつき」だ。俺の睨んだ所ぢや、君はたしかにこけエ晝飯を食ひに來たんぢやねエ。

青年——（尙更憤然として）餘り無禮な口を利くな。僕をつかまへて「案外正直だ」なんて何の事だ。正直でも不正直でも、君なごの構つたこぢやない。（此時語氣を一層強めて）唯併し僕を「嘘ツつき」こは何こ言つても承知ができない。「嘘ツつき」こ言ふからにはその證明をするか、證明ができなきア男らしく頭を下けてあやまり給へ。（大分昂奮したらしい語調で、聲に幽かな震ひさへ帯びてゐる。そして相手にやつこ聞取れるくらゐの低い調子で）紳士を勞働者の仲間扱ひするなんて實に無禮千萬……………

勞働者——（相手の言葉の未だ終り切らぬ中に思ひ切つて無遠慮なしかも皮肉な大聲で）ハツハツハツ、君が紳士かい。そんなら初めツから何も言ふんぢやなかつたんだ。俺またアわざ／＼こんな所エ來るほごの男だから、紳士なんて嫌エの方だこ思つてたんだ。そりや全く俺の方が悪かつた。が、併しだ。俺達の仲間扱ひされるこミヲソんなに厭が

る君が、何思つてこんな所エ晝飯なんぞ食ひに來たんだ。

青年——（蒼ざめた顔に多少狼狽の色を見せて）ン。そりやその…………イヤそんな事はこうだつていゝ。僕がなぜ「嘘ツつき」なのか、それを聞かせて貰ひ度いんだ。（少々心に思ひ當る節ができて來たらしく、ドコミなく不安な表情を示す）

勞働者——（聊か氣の毒さうに、併し相變らず皮肉な微笑を湛へながら）未だ君は解らねエツてエのか。君もみかけによらぬ感じの鈍い男だ。餘り好ましくもねエが、それぢや仕方かねエから「嘘ツつき」の證明をきかせやう。（問）俺ア最初君がこけエ入つて來た其時から、妙な奴さんが舞込んで來たなこ思つてたんだ。俺アぢやねエ俺達の若エ仲間ア、君達のやうな種類の人間を見るこ、妙に胸がむかついて來るんださうだ。ぶツちやけて言やア「コン畜生ツ」てエ心が起るんださうだ。その理窟ア、俺達のやうな無教育なもんによわからねエ。だが俺アかうだこ思つてる。君達のやうに蒼白エ顔して、眼鏡をかけて、頭の髪をピカ／＼綺麗にわけて、電車の中でわけのわからねエ英語の本を讀んだり、雑誌の小説を讀んでる者に限つて、その言ふこミ行つてる事たアまるツきり

辻褄が合はねエんだ。何でも他人の話による君達のやうな若エ男が二三人銀座邊のカ
 フェーかギツかへ集まるこ、話はすぐ女のここから初まつて、次にや必度やれ「労働者
 のため」だのやれ「民衆のため」だのツてエここに落ちて行くさうだ。労働者ツて俺達
 のこつたこ思ふが、民衆ツて何のこつたか俺にや未だよくわかんねエ。が、それもやつ
 ばし俺達のここヲ言つてるんださうだ。ソコでだ、俺達の仲間ア氣に喰はねエツてエン
 だ。『それこそこんだおせっかい様だ。ふざけるのも好い加減にして貰ひてエ。自分達ア
 雨のもらねエ家に住つて、うめエものばかり食つて、スベくした着物を着て、その上
 に未だ高エ西洋の酒を飲んだり、すきな藝者芝居見に行つたり、女を買つたり勝手氣
 儘のありツたけを盡しやがつてるくせに、何か書いたり演説したりする時にや、やれ「勞
 働者のため」だの何だのツて體裁のいゝここヲ言つちや人前を胡麻化してやアがる。
 奴さん達のだしに使はれる俺達こそいゝ面の皮だ。俺達アそんな人間を見るこ、胸糞が
 わるくなるんだ。俺達アそんな人間に、何一つ厄介エにならうたア思つちやるねエ。そ
 れに何だ。口先きばかりぢや、俺達の機嫌をこらうこらうツて苦心してる。俺達ア奴

さん達の口車に乗るにや、これまであんまり酷エ生活をして來たんだ』ツてかう言ふ
 だ。そこで君はさうだ。君は.....

青年——（知らず識らず相手の雄辯にひき入れられて、前の謝罪を求めた恐ろしい權幕も
 だんぐりつかへ消え失せる。そして穏やかな調子で）ン。さうか。そんな意味だつた
 のか。（これだけ言つて多少昂奮したらしい相手の顔を見つめながら、點頭いてそのまゝ
 沈黙する。）

労働者——（これも言葉や其他一體の調子を和ける）つまり俺の言ふのアカうだ。君は今こ
 けエ晝飯を食ひに來たツてエが、一體の君の素振りからして、俺にやさうもそれが面白
 半分でやつて來たこしか受取れねエんだ。『簡易食堂ツて一體みんなここだらう。そけエ
 集つて來る労働者ツてみんな連中だらう。自分はそれを知りてエ。自分の友達ア未だ一
 人だつて、こんなここの飯なんざア食つちやるめエ。それを一つ自慢してやらう。そし
 てそけエ集まつて來る連中を種に、何か小説でものたくつてやらう。』今日こけエやつて
 來た君の心の中を、すつかり打ち破つて見りや必度かうに違エねエ。併し今日は俺のや

うな性まじのよくなエ人間にミツつかまつて、君こそごんだ災難だ。
 青年——ア。それで僕を「嘘ツつき」だと言つたのか。そんな意味でなら僕も或る程度までたしかに「嘘ツつき」だつた。

II

勞働者——（だん／＼打解けて、話してゆく中にも始終人のよささうな微笑を、兩方の眼尻にたゞえてゐる）ン。君は思つたよりやいゝ人間だ。今日こゝで君にでくわしたの、こりや何かの因縁に違エねエ。このまゝ別れてしまふのは如何にも残念だ。君の方ぢや迷惑かも知らねエが、俺ア少々君にきいて貰ひてエこころがあるんだ。さうだ。暫らくきいて貰ふわけにやゆめエか。

青年——（眼をつぶつて快く點頭く）……………

勞働者——實ア俺アもさ、田舎で相當な百姓の一人ツ子だつたんだ。所が俺ア生れツつき

學問が嫌エの方で、そのかわり酒ミ女ミきちや人一倍好きだつた。（此時青年兩眼を細目に開いて、微笑をもらしつゝ相手の顔を見る）笑つちやいけねエ。全く本當の事なんだ。さうだ。恰度俺が中學三年の時だつた。俺ア續けて二度落こちた。それだけぢやねエ。俺ア其前にも小學校で一度さ、中學の入學試験に一度さ、都合四度落こちてゐた。それで中學の三年たつて其頃の俺アもう二十一の血氣盛りで、學校から放り出された時分にや町のある料理屋の酌婦さかなり深エ仲になつてた。學校から退校を喰つた時、昔氣質の親爺ア、勘當するツてひごく敦圍いんまいた。氣弱な阿母おふちは、親爺への氣兼ねさ俺の可愛さこの間に板挟みになつて、毎日毎晩嘘を眞赤に泣き腫してた。併し肝腎の俺ア、そんなこたア一向氣にならなんだ。たゞ其女ミの約束があつたので、さうして二百五十圓さいふ女の前借金を自分の手許で拵へてやらうかミ、明けても暮れても其事ばかり考へ込んでた。その中其女は他の男ミ出來合つて、臺灣さか朝鮮さけエ高飛びしやがつた。俺ア眞實のこア、其女にや初めツからさう心を打ち込んぢやるなかつたんだ。だかゝその驅落ちの噂をきいた時だつて別段何さ思はなんだ。唯併し昨日まぢや頭髮の先きから

足の爪先迄自分の思ひ通りさうにでもなつた一人の女が、僅か一日の間に全く自分の力の及ばねエ他の男の腕に抱かれて行つちやつたかと思やア、男の手前俺アさうしても我慢できなんだ。俺ア早速二人の後を追驅けて、二人も打殺してくれやうかとも思つたが、あんな奴等の命この俺の大事な命を取換へこころするのあんまり馬鹿々しい氣がしたし、それに女と約束の二百五十圓も思ふやうに出来かねたので、女の驅落ちを其時の自分にや却つて都合よいやうにも思つた。

其後二三年の中に、親爺アある間違エから暗い所エ繋がれて牢屋の中で首を縊る。家屋敷はすつかり人手に渡る。阿母アそれを苦にして、さうく病で死んでしまふ。其時ばかりア、流石の俺も人並に心淋しくなつて、一層のこ田舎寺の坊主にでもなつちやおふかこ迷つたが『なに糞ッ。俺ア未だく若エんだ。廣い東京へ出て一つ立派な男になつてやらう』と氣を取直して東京へ出て來たのが恰度今から二十年前、俺の二十五の春だつた。東京へ出て來てからの俺ア、人間のやれる仕事は大抵一こ通りやつて來た。新聞配達や牛乳配達は無論のここ、車夫にもなつた。電車の車掌もやつてみた。それが

らまた商店の小僧にも、辯護士の書生にも、砲兵工廠の職工にもなつた。もつこ落ちぶれてからア、電信電燈工夫の下働きにもなつた。また……こりや今でもちつたア自分の氣に咎めちやるが……自分の卑しい根性から、一時はあの風呂屋の三助にまでなり下つた、……

青年——（この見窄らしい一個の労働者が、それほど深刻な大きい過去を有つてゐたのか、今更ながら尊敬に近い一種の感慨に打たれて重々しく口を開く）そして君は今何してゐるんだ。

労働者——何ツて別にこれツてエ定つた仕事もねエんだが、まアかうやつて道人夫の手傳ひなんぞして、其日々を送つてゐるんだ。

青年——それぢや東京へ出て來る時の『一つ立派な男になつてやらう』といふあの最初の意氣込みはさうしたんだ。

労働者——君までがそんな事ヲ言ふたア俺ア情ねエ。俺ア今日まで二十年の長エ間、ありこあらゆる世間の汚ねエここや、人間の心の淺ましい間を通り抜けて來たおかけで、此

頃やつこ自分の行先が見えて來たやうな氣がするんだ。俺ア今ぢやもう、世間並の立派な男なんぞにや、爪の垢ほぎだつてなりたかねエ。それよりや、さうかして善い人間、本當の人間になりてエ。竹のやうな眞直ぐな人間になりてエ。たゞそれだけのこゝなんだ。こんな見窄らしい服装して、道人夫の手傳ひなんかしてちや、俺の言ふこたア、瘦我慢しか聞えぬエ。併し今の俺にや他人がさう言はふこ、そんな事ア本當にさうだつていふんだ。

青年——あゝ。君の心の中が大分はつきりわかつて來た。何れにしてもそりや君さして、實にさ偉い悟りを開いたものだ。序に君が善い人間、本當の人間になりたいと思ふやうになつた、その動機を聞かせて貰ひたいが話して呉れないか。

勞働者——動機ツて一體何の事ツた？

青年——さうく、僕が悪かつた。つまりその……さう思ふやうになつた理由サ。

勞働者——理由ツて別に俺達のこつたから難かしい理窟も何も知らねエ。が、俺アもう五六年も前から、人間の世の中ツてなせもつこ仲よくしてゆかれねエものか知らんて、こん

な事ヲほんやり考エ込むやうになつた。俺の考エぢや、人間はもつこ仲よくしてゆける筈なんだ。仲よくしてゆけねエなんて、そんな法はねエ。ゆけねエのぢやねエ、ゆかねエんだ。例へばだ。俺達がひでエ一日の仕事を終つて、夕方泥まみれになつたまんま電車で家へ歸エるこする。電車の中にや朝湯につかつて綺麗にお化粧でもして來たらしい、立派なミツかの妻君が乗つかつてる。またその隣りにや、宴會の歸りらしい禮服の紳士がおさまつてる。其前に俺達の腐エ汚ねエからだが立塞がるこ、十人が十人まで顔を素向けて、必度厭な澁ッ面を見せる。君だつてそんな時にや必度さうするに違エねエ。併しこれなんざア、未だ辛抱できる方だ。一等癪にさわるなア、白壁のやうにこつてり白粉を顔や首になすりつけて、俺達の汚ねエ法被のさわつたミツコヲ、香水か何かくツつけた絹のハンケシで、狸のやうな膨れッ面しながら清めてけつかる女共だ。そんな時、俺達の心の中はドンなに腹が立つか嚇ツミなつてつひ横ッ面の二つ三つもなぐりつけたくなる。併し萬一拳固でも振上げたが最後、俺達アすぐ警察へ引張られてこんでもねエ馬鹿を見る。仕方がねエから長い物にや卷かれるで「コン畜生ツ！」位を口の中で言つて我

慢はしてるものゝ、そんな時ア俺達ア本當に齒がなるほさ口惜しい。俺達ア時々泣きてエこさへある。俺達だつて何も好んでこんな汚ねエ服装をしてるんぢやねエ。俺達だつて人間だ。人並に美味エものも食ひたけりや、いゝ着物もきてエ。がそんなこゝしてちや生きてゆかれねエから、仕方なしにこんな見窄らしい風をしてるんだ。俺ア世間の人達ア、そこんこゝちもちツこ考エて貰ひてエツて、いつでもさう思ふんだ。

青年——（何氣なく自分の服装を見返してやゝ顔を赧める）ン。そこなんだ。其事については此頃の學者も政治家も吾々青年も、みんな一生懸命になつて考へてゐるんだ。

勞働者——成程考エてはゐるんだらう。がその考エ方が十人が十人、みんな自分達に都合のいゝ方から考エてるツから、いつまで経つたつて駄目なんだ。赤ン坊が腹を空らかして泣いてるこする。腹を空らかしてるからツて、何でも食ひ物さへ呉れてやりやそれでいゝかツてエに決してさうぢやねエ。腹は空らかしてるが奴の欲しがつてるのはパンや飯や菓子ぢやなくつて乳なんだ。だから奴に幾らそんな物呉れたつて、いつまで経つても泣きやめやしねエ。つまりソコに大人の間違エがあるんだ。何故かツてエに、その赤ン

坊にパンや飯を呉れてやらうツてする大人は、大人の心持ちから赤ン坊の空腹を見てるからなんだ。本當に奴を可哀相だカエエと思やア、大人の心持ちをすてゝ、赤ン坊の心持ちになつて仕舞はなきや嘘だ。俺ア世間の學者だこか政治家だこか青年てエ連中が、勞働者のこゝち考エてるこいふが、そりや恰度この大人のやうなものぢやねエかと思ふんだ。君は一體さう考エる？

青年——僕も確かにさういふ所があるこ思ふ。だがソコにまた、非常に難かしい問題があるんだ。こいふのは、君の議論を最後の所まで押進めてゆくこ、世間の人間がみんな勞働者の地位まで下つてゆかなかきアならないここゝなるんだ。

勞働者——まアそれが本當かも知れねエ。自分で勞働者になつて見なきア勞働者の心持ちなんてそりや逆もわかるもんぢやねエ。俺ア勞働者の味方顔してる學者だの政治家だのツてエ連中がいつまで今のやうな芝居を打つてゐられツか、それがかなり面白エ觀物だと思つてるんだ。

青年——そりや本當のここだ。併しこれは世間の一部の人達が考へてゐるほさ、さう簡單

な問題ではない。

勞働者——俺も實ア難かしい理窟はよくわからねエが、世間の人間を誰も彼も、みんな今の俺達、やうな者にして仕舞ふ事にや反對なんだ。が多少讀み書きのできる仲間の若エ連中は、やつぱしそれが何より肝腎な事たつてさう言つてる。先生達はかう言ふんだ。人間の世界は錢湯のやうぢやなくちやいけねエ。風呂場ツてエ一つの新規な世界に入るにや百萬長者も、學者も、政治家も、丁稚小僧も、俺達のやうな勞働者も、乞食も、立ン坊も、一切合切まる裸體にならなきやならねエ。人間はピカ／＼した着物をきたり、勳章をぶら下げたり、餘計なものを身體にくつつけるこ、さうも其間に別 世界の人間てエやうな、よそ／＼しい感じが起つて来る。併し一旦まる裸體になつてみるこ、大臣だつて、金持ちだつて、俺達だつて、一向變りがねエ。イヤ俺達の方が體格のいゝだけ、却つて偉エやうな氣がする位だ。そしてそのまる裸體の世界はさうかツてエに、心がのび／＼して如何にも住心地がいゝ。その證據にや、風呂の中ア人間の澤山寄り集まる所、こしちや、一等喧嘩が妙ねエ。だから錢湯の外でだつて相互エに住心地のいゝ、窮窟な

思ひをしねエですむ世の中ツてありさうなもんだ。ねエのが嘘だ、ねエツてなア、そりやきつかに必度間違エがあるんだ。それにや世間の人間が、みんなまっ裸體にならなきやいけねエツてかう言ふんだ。

青年——(つぶつてゐた眼を急に見開いて)其事についちや、僕達だつてこれまで随分考へつゞけて來たんだ。そしてその新しい世界は、從來の人間の社會生活に根強くこびりついでゐた、いろ／＼の不幸な間違ひを正す上に非常な力であるこも事實だ。唯併しその新しい世界は、人間の落着くべき最後の理想郷——安心立命の極樂淨土でないこも、同時に忘れてはならない。假令人間は一切の地位、財産、權力を抛つて赤裸々な一個の「自然人」に立返つたこしても、その新しい世界に於てはまた別の標準から人間の不平等、随つて凡ての害惡の根源たる不公平さいふものが起つて来る。例へば體格のいゝものさか、才能の秀れたものさか、いつの間にか他の者より優秀な地歩を占めて、それが増長するこ以前の舊い世界に於ける地位、財産、權力等の享有者によつて醸されたこ同様の不公平、不道德が繰り返される虞があるのだ。

勞働者——大分理窟が難しくなつて來て俺にやよくわからねエが、大概のここア見當がつく。俺がほかの若エ仲間こ少しツばち考エの違ふ點も、今君の言つた其邊の事ぢやねエかと思ふんだ。

青年——つまり僕は、人間の作つたものは畢竟人間の作つたもの、人間の手に成つた改革は結局人間の手になつた改革に過ぎないツてかう考へるんだ。平和の時代に澤山の金こ手間こをかけて折角拵へ上げた立派な建物や繪や彫刻も、一旦戦争がおつ初まるこ、何よりも先きに人目につき易い此等のものを打壊して仕舞はふこ敵同士相互に苦心する。平和が來ればまた舊のやうなものを拵へる。戦争が初まれば再びまたそれを叩き壊す。人間の頭こ手になつたものを、人間の頭こ手で打ち壊さうこするのだから、其事に没頭してゐる人間自身からみれば戦争の時の破壊行爲も、平和時代の建設事業も、共に命がけの眞剣な仕事に違ひない。併し少時さういふ人間自身の世界を離れて、もツこ高いもツこ廣い立場から人間のやつてゐるここを眺めれば、それが眞剣であればあるほご、また眞面目であればあるほご、一層傷ましいやうな終には滑稽なやうな感じさへする。世

の中の改革こか改善こかだつて大體その通りだ。人間の頭こ手で、或る一つの制度か組織を作つたここする。その制度なり組織なりが、窮窟だこか時勢に合はないこかいふのでそれを廢止するか改正する。すぐそのあこからまた新たな不都合が起つて來る。更にその不都合に對する新制度、新組織を作る。それが纏てまたいけなくなる——こんな工合でいつまで經つても切りがない。併し僕の言ふここを誤解しちやいけない。僕は成程人間の頭や力に絶對の信任をおき得ない。併し其結果は僕をして凡ての成行を自然に任せるといふ宿命論に到らしめずして、却つてそれこ反對の熱烈な努力主義に赴かしめた。『人間は駄目だ。人間の力は弱い。だから吾々は益々しつかりしなくちやならない。』これが今の僕の動かし難い信仰だ。其故僕が人間の作つたもの、人間の手に成れる改革に最後の信任をおき得ないこいふのも、それがため決して其等の意義や價値を全然否認しやうこするからではない。たゞ其等に對して絶對の信任をおくここは、非常に危険だこ言ふまでのここだ。これだけの用心さへしてをれば吾々は寧ろ人間並に、その時代その時勢に適應する最善の改革、それに要する最善の努力を寸時も怠るべきではない。それを

忘れれば忽ち社會の進歩が停止する。社會の進歩と時勢の進歩とが伴はない時、ソコに必ず暴力による政治上、社會上の新運動が起つて来る。そしてそれは多くの場合正當だ。随つて是認さるべきものだ。何となれば凡て事物の本當の平均状態の中には本當に善いもの、美しくしいもの、正しいもの、やがて健全なものが見出さるゝからだ。併し前にも言つた通り人間の力、人間の手によつてのみ、この地上に天國のやうな立派な人間社會の理想郷が實現されるものと思ふのは、それは確かに高慢な人間の自惚だ。如何に優秀な改革、進歩的な改善にしろ、それが苟くも限りある人間の力と手に成れる以上、その時代乃至は次の時代、次の次の時代に於てのみ肯定され是認さるべきもので、到底永遠の生命随つて永遠の價値を保ち得るものではない。永遠の生命及び價値を持續し得んがためには、その根柢にやはり「永遠的な大きな或るもの」の力が活いてゐなければならぬ。理窟や學問で懷れない、或る大きな力が潜んでゐなければならぬ。一切の政治上社會上の改善改革の是認に對して、これだけの留保はぜひ必要ではなからうか。——現在、僕の僕はかう考へてゐるんだ。

勞働者——君の言ふことア、俺にやよくわからねエ。が、大體こんな事ヲ言つてゐるんだなツてエ位のことア感付ける。つまり君の理窟を平ツたく言やアかうなんだらう。俺達の仲間のいふまる裸體の世界ができりや、これまでの世の中にあつたいろんな間違エはなくなる。が、五十年百年を経つ中によ、また舊の世界のやうに何か別の不都合が起つて来る。だから人間のやることア、ドコまでもやらなきやならねエが、それですつかり安心しちやふミ、大變な思ひ違エをするこゝになるツてエんだらう。

青年——さうだ。全くその通りだ。

勞働者——それで俺も心に思ひ當るこゝがあるんだ。俺の考エぢや、世間にや善い人間だの悪い人間だのツてそんな區別アねエミ思ふんだ。昔ツから「人を見りや敵ミ思へ」ツて言つてるかと思ふミ、今度は「渡る世間に鬼はなし」なんてエ諺がある。こりや一體さつちが本當なんだ。俺アさつちも本當だと思ふ。またさつちも嘘だと思ふ。何故ツて、世間にや善い人間だの悪い人間だのツて、そんな區別ア初めツからねエんだ。そりや全く自分の心持ち次第でさうにでもなるんだ。自分の心の持ちやう一つで、世間に善い人

間がるたり悪い人間がるたりする。また同じ人間でも昨日は善い人間だつたり、今日は悪い人間になつたりするんだ。そこで俺ア一人で考エたんだ。こりや何でも自分の心を眞直ぐにするに限る。それが一番大事なコツた。それさへできりや、世間は明るくなる。世間の人ア、みんな正直な善い人間ばかりになる。併しそれができなきア、その反對に世間が暗くなつて、世間の人間は十人が十人、不正直な悪い人間ばかりになつて来る。かういふ譯合で、俺アさつき『敵ミ思へ』ツてエのも『鬼はなし』ツてエのも、本當ミ思やア本當だし、嘘だミ思やア嘘だつてさう言つたんだ。

青年——さうくソコだ、肝腎なのは。制度の改革や組織の改善よりもつこく大切な事は人間の心を改造することだ。これができなきア百の改革も千の改善も、つまるところは前言つたやうな始末に終るんだ。僕が世界中の偉い學者や藝術家や政治家の誰の仕事よりも、基督や釋迦の残して行つた事業を遙かに尊いと思ふのも全くこの意味からなんだ。それは兎も角、君のその悟りは實に素晴らしいものだ。だがそれまで漕ぎつけるには、一ミ通りの修養ではいけない。愧かしながら僕なんぞは、君から見りや未だくほ

んの赤ン坊だ。

勞働者——そんなに更まつちやいけねエ。が、俺の心にも今ちやもう、君と同じ人間だツてエここがわかつて來た。俺ミ君たア、服装みなりの上から言つたツて大變な段違だんちがひエだ。が併し、俺の眼にや今もうそんな違エなんざア、まるつきり映つちや來ねエ。たゞ君のその洋服の下の心の一番奥の方にある「人間の姿」が見えるばかりだ。そしてその『人間の姿』はこの泥腐エ俺の法被の下にも眠つてるんだ。今その二つが顔を向き合せて、しつかり手を握り合つたんだ。俺アもう何だか嬉しくツて、この通り眼に涙が一杯たまつて來た。(かう言つて泥まみれの法被の袖で涙をふく)

青年——(非常に感動した面持ちで)僕も今日偶然の—實に偶然の機會が此の世の中に、しかも實際のこころを白狀すれば寧ろ僕達の平生侮蔑してゐた勞働者の中に、君のやうな立派な心の持主のあるこころを教へて呉れたこころを此上なく感謝する。僕は君の今立つてゐるこころまで辿り着くには、未だく深い修養をつみ、苦しい旅をつゞけて行かなければならない。さちらかさいへば現在の僕は、他人のこころよりも「自分自身のこころ」を

より多く考へてゐる。其外に今の僕さして眞實の「生き方」のないことを信じてゐるからだ。併し僕は同時に、今自分の心の内に向けられてゐるこの心の眼は、やがて自分の外にある一切の自然及び周圍に對し、更に大きい力さ愛さを以て向けられなければならないことをも信じてゐる。そして僕は、自分にはその時機の早晚やつて來ることをも確信してゐる。其時こそ吾々は心の奥底から打解けて、同じ「人間の生活」を樂しむことが出来る。そのためにも——イヤそのためにこそ、現在の僕は出来るだけ深く鋭く、自分自身を見つめてゆくことが、人間さして最も眞面目な努力ではないかと思つてゐるんだ。僕には善くつても惡くつても、胡麻化しの生活が一等厭だから。

勞働者——ン、それが大事だ。どんな時ツたツて、自分の心にねエことだけは言つてくれるな。そして自分の言つたことにや、死んでも責任をもつやうにして呉れ。何がいけねエたツて、嘘ツつきは一等いけねエ。

青年——あゝ。君のその言葉を今日の記念にありがたく頂戴してゆく。(二人はいつか堅く手を握り合つて、相手の顔を互ひに黙つてみつめてゐる。眩しい冬の日の午後の日射が、

食堂の硝子戸を通して二人の横顔を斜に照してゐる。青年の眼鏡の下にはキラ／＼涙の玉が光つてゐる。)

勞働者、青年——では御機嫌よう。(やがて青年はM停留場から電車に乗る。勞働者は冷たい雪搔きの柄を握つたまゝ、その電車の後をほんやり見送つてゐる。)

(一九一九年二月)

大正八年四月二十四日印刷
大正八年五月二十五日發行



未來は我等のものなり 全

定價金貳円

著者 井口孝親

發行者 佐藤卯兵衛

東京市神田區駿河臺錦木町十六番地

印刷者 丸貴郎

東京市京橋區具足町九番地

印刷所 日本印刷出版合資會社

東京市京橋區具足町九番地

發行所

東京市神田區駿河臺
鈴木町拾六番地

佐藤出版部

電話神田二七一五番
振替口座東京二九〇二九番

387
11

終